### ACL読み会

# **Improving Entity Linking by Modeling Latent Relations between Mentions**

Phong Le<sup>1</sup> and Ivan Titov<sup>1,2</sup>
<sup>1</sup>University of Edinburgh <sup>2</sup>University of Amsterdam

紹介者:駒水孝裕(名古屋大学)

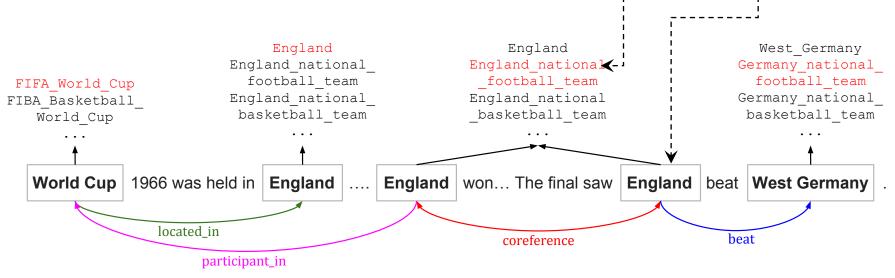
# 概要

- 問題: Entity Linking
- ・従来:ヒューリスティクス,教師あり学習
- ・課題:教師なしでEntity Linkingの実現
- 手法: 1. 関係を隠れ変数として導入
  - 2. 複数の関係を考慮することで多様な関係を表現
- 実験: AIDA-CoNLLデータセットで 最新研究と比較
- 結果:1. 最新研究よりも精度向上
  - 2. 複数の関係の導入が精度に貢献

entity mention

# **Entity Linking**

- Given: mentions  $\{m_i\}_{i=0}^N$
- Find : entities  $\{e_i\}_{i=0}^N$



#### Local model

$$e_i^* = \underset{e_i \in C_i}{\operatorname{arg\,max}} \Psi(e_i, c_i)$$

$$e_i^* = \underset{e_i \in C_i}{\operatorname{arg \, max}} \Psi(e_i, c_i) \qquad E^* = \underset{E \in C_1 \times ... \times C_n}{\operatorname{arg \, max}} \sum_{i=1}^n \Psi(e_i, c_i) + \Phi(E, D)$$

# 既存手法

$$E^* = \underset{E \in C_1 \times \dots \times C_n}{\operatorname{arg \, max}} \sum_{i=1}^n \Psi(e_i, c_i) + \Phi(E, D)$$

- mention間の関係
  - coreference: 2つのmentionが同じentityを指示
  - ・それ以外の関係
    - Cheng and Roth (2013), Ren et al. (2017), など
      - 人手で作成したルールに基づいてentity間の関係を定義
    - 関係抽出自体が難しいタスクなので、ほとんどない

### • 表現学習

- コンテキストの表現とentityの表現の関連性
- feature engineeringから発展
  - entityに対応するWikipediaのページタイトルの 単語ベクトルのコサイン類似度
- ・各表現の学習とその間の"単一の"関連性の学習

$$\Phi(e_i, e_j, D) = \frac{1}{n-1} \mathbf{e}_i^T \mathbf{R} \mathbf{e}_j$$

### 提案手法: multi-relational model

• エンティティ間の関連性

$$E^* = \underset{E \in C_1 \times ... \times C_n}{\operatorname{arg \, max}} \sum_{i=1}^n \Psi(e_i, c_i) + \Phi(E, D)$$

• K個の潜在的な関係の和で表現

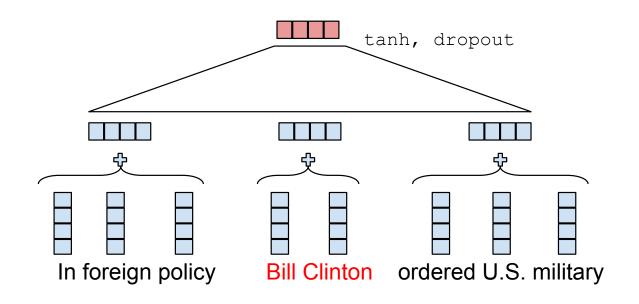
$$\Phi(e_i,e_j,D) = \sum_{k=1}^K \underline{\alpha_{ijk}} \Phi_k(e_i,e_j,D)$$
 確信度  $k$ 番目の関連性に基づくスコア

# 確信度

$$\alpha_{ijk} = \frac{1}{Z_{ijk}} \exp\left\{\frac{f^T(m_i, c_i)\mathbf{D}_k f(m_j, c_j)}{\sqrt{d}}\right\}$$

- Z<sub>ijk</sub>: 正規化項
- f(m,c): mention m とコンテキスト c を 埋め込む関数
- $\mathbf{D}_k$ : ベクトル成分の重みを表現する対角行列
- d: 埋め込むベクトル空間の次元数

# 埋め込み関数 f(m,c)

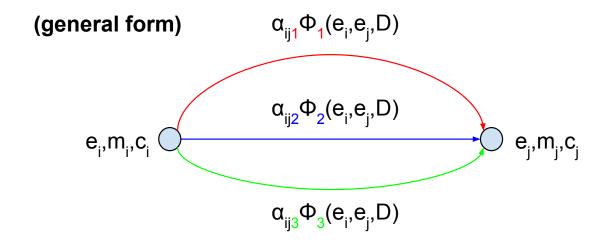


### 単層ニューラルネットワーク

- 活性化関数: tanh
- ドロップアウト

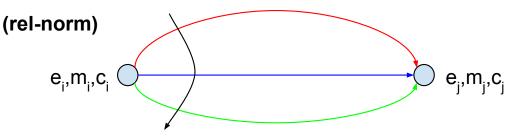
# 正規化項

$$\alpha_{ijk} = \frac{1}{Z_{ijk}} \exp\left\{\frac{f^T(m_i, c_i)\mathbf{D}_k f(m_j, c_j)}{\sqrt{d}}\right\}$$



# 正規化方式の選択

### 関係について正規化

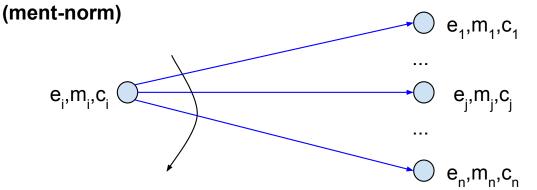


normalize over relations:  $\alpha_{ii1} + \alpha_{ii2} + \alpha_{ii3} = 1$ 

#### αの役割

mention ペアがどの 関係に関連するかを 表す確率

mention について正規化



 $e_{_{\!1},\mathsf{m}_{_{\!1}},\mathsf{c}_{_{\!1}}}$  mention  $m_i$  に 対して関係 k を  $e_{_{\!j},\mathsf{m}_{_{\!j}},\mathsf{c}_{_{\!j}}}$  通じてmention  $m_j$ が 関係しているかを  $e_{_{\!n},\mathsf{m}_{\!n},\mathsf{c}_{\!n}}$  表す確率

normalize over mentions:

$$\alpha_{i12} + \alpha_{i22} + \dots + \alpha_{ii2} + \dots + \alpha_{in2} = 1$$

# 実験

- Entity Linkingの精度を評価
- 比較手法
  - 提案手法 (rel-norm) ← 正規化手法の比較
     提案手法 (ment-norm (no pad)) ← 工夫の効果検証
     提案手法 (ment-norm (K=1)) ← 複数関連の効果検証
  - 既存手法
- 設定
  - データセット:AIDA-CoNLL
  - 評価指標: F1のマイクロ平均(5回, 95%信頼区間)
  - 潜在関連数:6 (rel-norm), 3 (ment-norm)
    - 実験的に決定

# 実験結果

Methods	Aida-B	
Chisholm and Hachey (2015)	88.7	
Guo and Barbosa (2016)	89.0	
Globerson et al. (2016)	91.0	
Yamada et al. (2016)	91.5	ment-norm が
Ganea and Hofmann (2017)	$92.22 \pm 0.14$	/rel-norm より良い
rel-norm	$92.41 \pm 0.19$	
ment-norm	<b>93.07</b> ± 0.27 <b></b>	
ment-norm $(K=1)$	$92.89 \pm 0.21 \leftarrow$	
ment-norm (no pad)	$92.37 \pm 0.26$	複数の潜在関連を     はある。     はおる。     はなる。      はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。      はなる。    はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。     はなる。    はなる
	•	取り入れることが良い

- 提案手法 (ment-norm) が最良
- 計算量的には既存手法より高いが 収束が早いので問題にはならない

### まとめ

- 問題: Entity Linking
- ・従来:ヒューリスティクス,教師あり学習
- ・課題:教師なしでEntity Linkingの実現
- 手法: 1. 関係を隠れ変数として導入
  - 2. 複数の関係を考慮することで多様な関係を表現
- 実験: AIDA-CoNLLデータセットで 最新研究と比較
- 結果:1. 最新研究よりも精度向上
  - 2. 複数の関係の導入が精度に貢献